

接触場面の語りの談話における 日本語母語話者の聞き手調整行動

澤 恩嬉

1 はじめに

本稿は、日本語非母語話者が母語話者にアニメーション・ストーリーを語るという役割が固定された談話において、聞き手である日本語母語話者が非母語話者の発話を理解するため、また、語りの目的達成のためにどのように語りの中に介入し、非母語話者に働きかけるのか、その調整行動を観察し、分析したものである。

一般に語りの談話では、語りが適切な方法で開始されると、その結末だと見なしうる発話要素に至るまで、他の参加者（聞き手）は発話を控えることが期待される（Sacks, 1992：串田, 2009訳）という。しかし、実際には、聞き手は語りの途中でしばしば発話を行う。李（2000）、西川（2005）では、親しい者同士の会話における語り手と聞き手の相互行為を分析し、語りが語り手だけの一方的な行為で成り立つものではなく、聞き手の共同的な参加によって構築されるものであることを述べている。特に言語的リソースが限られている状況とも言える接触場面の場合は、母語場面に比べ、より顕著にやりとりが現れると考えられる。本稿は、接触場面における聞き手である日本語母語話者は、日本語非母語話者の語りをどのように受け、働きかけているか、また、「上手く行かない」場面に直面した時、どのように非母語話者と協力しながら伝達目標を達成させていくのかを観察し、接触場面の語りの談話における日本語母語話者の聞き手行動の特徴を明らかにすることを目的とする。

2 語りの談話の聞き手行動

コミュニケーションに関する研究において「聞き手」という用語が扱うものは次の二つに分類される（伝, 2009）。一つ目は、実質的発話を行う話し手の発話をあいづち的反応をもって受ける聞き手である。実質的発話とは、説明、質問、要求など実質的な内容を含む発話を指し、あいづち的反応とは、「うん」「はい」「ええ」のように

実質的な内容をもたない発話を指す。会話者は実質的発話を行う話し手とあいづち的発話を行う聞き手の役割を絶えず交替しながら会話に参加していることになる。二つ目の聞き手とは、会話においてひと続きのまとまった話を受ける立場にある聞き手である。たとえば、会話の流れの中で会話者の一人がある出来事を描写する際、その語りを受ける役割を担う者や、カウンセリングにおけるカウンセラーのように聞き手の立場を維持する者がここに含まれる。伝（2009）は、聞き手という立場をこのように捉えることによって、あいづちだけでなく、相手の話に適合した反応や働きかけを返す相互行為の過程を聞き手行動の範囲に入れて分析することが可能となると述べている。

本稿で扱う「聞き手」は、上記二つのうち二つ目のひと続きのまとまった話を受け、あいづち的反応だけでなく実質的発話も行いながら反応や働きかけを返す者である。また、「聞き手行動」とは、聞き手が語り手に対して行うすべての発話を指すものとする。

相手の語りを聞く立場にある者としての聞き手を扱った研究には、串田（2009）がある。串田（2009）によると、聞き手は、あいづちによる「継続支持」、「それで？」などによる「継続促進」、さらに聞き手みずから語りの継続そのものを行う「継続試行」を行いながら、語りの進行を促進していると述べている。

3 接触場面における日本語母語話者の言語行動

3.1 非母語話者に対する母語話者の発話の特徴

接触場面の場合、主に母語話者が会話をリードし、話を展開させる責任を担うことが多い。接触場面における母語話者の、対非母語話者言語行動の方略としては、「フォリナー・トーク」というものがある。

フォリナー・トークの特徴については、ロング（1992）の分類があり、大きく言語形式的（formal）なものと、機能的（functional）なものに大別される。言語形式的な特徴は、「インプット面における調整（input modifications）」であり、音声・語彙・文法などを簡単なものに変えたりする現象である。一方、機能的な特徴は、相互交渉面における調整（interactional modifications）であり、相手が話を分かっているかどうかを確かめる「理解の確認（confirmation checks）」、あるいは情報の「明確化の要求（requests for information）」などの談話レベルの特徴である。

このようなフォリナー・トークの特徴は、どちらかといえば母語話者の話し手（本研究では語り手）としての言語行動である。しかし、本研究における日本語母語話者は、語り手である日本語非母語話者の説明を聞いて理解するという役割を担うので、母語話者の聞き手としての言語行動を観察するための概念が必要になってくる。

3.2 接触場面における日本語母語話者が行う意味交渉の方法

村上（1997）は、日本語母語話者と非母語話者との接触場面において、非母語話者の発話を理解するのが困難な際に母語話者が行う「意味交渉」¹の方法を①訂正（error corrections）、②貢献・完成（contributions / completions）、③精密化（elaborations）、④確認チェック（confirmation checks）、⑤明確化要求（clarification requests）の5項目に分けている。その上で、母語話者側が非母語話者とどの程度接触経験があるかによって、この「意味交渉」の頻度に与える影響を調べている。

以下、村上（1997）の調査データを例に、「意味交渉」の方法の5項目について説明する。

例1）、例2）は、①の「訂正」の例である。

- 例1) 1 J あぐらってご存じですか。
 2 F あぶら.
 3 J あぐら.
 4 F あぐら.

- 例2) 1 F 彼は走って、走っているそうですね.
 2 J そうですね、走ってますね,
 3 F 走っています、そうです、はい.

これは、言語形式及び内容に関して不適切な、非母語話者のいいまわしを日本語母語話者が訂正しているもので、例1）のように明示的な訂正と、例2）のように明示的でないものがある。

次に②の「貢献・完成」とは、非母語話者が適当な語彙や表現を探せないでいる時に、母語話者がそのことばを予想して、非母語話者の発話を引き取って、代わりに発話して完成させるもので、例3）～例6）のようなケースがある。

- 例3) 1 F ああ、木、木の、何、木の下のところはなんと言いますか、枝の下に、
 2 J はい。
 3 F 太い、あー、ところはなんと言いますか.
 4 J 幹ですか.
 5 F 幹。
 6 J 木の幹.
 7 F 幹。
 8 J はい.

¹ 「意味交渉 (negotiation of meaning)」という用語は、「交渉 (negotiation)」としても使用される。村上（1997）は、Pica（1994）の定義に従い、「この用語は、学習者とその会話の相手とが、メッセージの理解の困難を予期したり、認めたり、または経験したりする時に起こる、インタラクションの修正及び再構築の特徴を述べるために使用されている。」と訳している。

例3) は、日本語非母語話者が援助を明らかに求めているのに対し、発話4と発話6で母語話者が積極的に「貢献・完成」を行っている例である。この例の非母語話者の発話1や発話3は、藤長(1995)²の「直接アピール」に該当する発話で、このような非母語話者の直接的な援助要求を受けて母語話者が手助けをしているものである。

- 例4) 1 F 本の、あ、正面じゃなくて、本の、
 2 J ああ、背表紙？本の背中？
 3 F あ、はい、そうです。

例4) は、非母語話者が援助を明らかに求めている、藤長(1995)の「間接アピール」に該当するケースで、発話2の部分が「貢献・完成」の母語話者の発話である。例5) は、母語話者の「貢献・完成」が成功した場合で、例6) は、母語話者が予想して完成させた発話が非母語話者の意図していたものではなかった場合の例である。

- 例5) 1 J あ、これも泥棒か？泥棒でしょうか？
 2 F あー、泥棒じゃないんだけど、ただ、
 3 J ああ、いたずら？
 4 F うん、いたずらっ子。

- 例6) 1 F そして、あ、電気とかは、
 2 J うん、明るいです。
 3 F 明るくない、そんなに明るくない。
 4 J 明るくない。
 5 F でも平和な、
 6 J 暗い。
 7 F うん、
 8 J ああ、そうなんですか。
 9 F 感じです。

③の「精密化」は、例7)のように非母語話者の発話(質問も含む)に対して、母語話者が情報を付け加えた形で繰り返したり、完成させたりするもので、例8)のように、非母語話者に情報を付け加えさせようとして質問する場合も含まれる。

² 藤長(1995)の「共同解決型」は、(1)完成要求と、(2)確認要求に下位分類される。(1)の「完成要求」とは、不明の語彙や表現について聞き手の助けを求めることによって、発話を完成する戦略で、さらに①直接アピール、②間接アピール、③ジェスチャー型の3つに分類される。(2)の「確認要求」は、自分の発話について聞き手に確認を求める戦略で、①語彙や形の確認要求と②理解の確認要求に下位分類される。

- 例7) 1 F あー、箱は、ふたつあります。
 2 J 箱がふたつあります。
 3 F はい。
 4 J そのひとつひとつ、それぞれに、
 5 F はい。
 6 J バナナと多分りんごかな？
 7 F あありんごですか。
- 例8) 1 F その、あ、黒い髪の毛の女の人の、ちょっと、あー、後ろ、右の方に、
 2 J はい。
 3 F もう、ひとりの、
 4 J ああ。
 5 F 男の人が、
 6 J ああいますいます。
 7 F うん。
 8 J 帽子をかぶっていますか。
 9 F はい。

④の「確認チェック」は、非母語話者の発話を母語話者が正しく理解しているかどうかを、母語話者が非母語話者に確認するものである。例9)のように、非母語話者の発話があいまいであったものを、母語話者が言うことによって確認を行う場合や、例10)のように、母語話者が非母語話者の発話の全部または一部分を繰り返して、非母語話者に対する自分の理解を確認するために質問の形をとることもある。

- 例9) 1 J そしてー、クッションが3枚。
 2 F はい。
 3 J ある？
 4 F はい、あります。
- 例10) 1 J あの、ドアに、入り口のドアに窓がありますか。
 2 F はい、
 3 J ああ、
 4 F ふたつあります。
 5 J 窓がふたつあります？
 6 F ドアも、ふたつあります。
 7 J ドアもふたつあります？
 8 F はい。

最後に⑤の「明確化要求」は、母語話者が、非母語話者の発話を明確に理解できない時やよく聞きとれなかった時に、非母語話者に発話を明確にするよう要求するものである。例11)は、1つの文になっている「明確化要求」の例で、例12)は、ただ聞き返すだけの場合である。

- 例11) 1 F でその、あの一、年寄り、の男の人、そのおじいさん、
 2 J はい、あ、まん、
 3 F は、あ一、髪の毛はし、白、白っぽいですね。
 4 J と、おじいさん、どこのおじいさんかな？
 5 F ああ、
 6 J ん？
 7 F バスストップ、停留所に、
 8 J あ待ってる、そうそう、は、白いですね。
 9 F はい。

- 例12) 1 J 普通の鍋ですか。
 2 F ああ、違います。うーん、カバーが、あります。
 3 J 何？
 4 F あ、カ、カバー。
 5 J あ、蓋がある？
 6 F 蓋がある。

澤 (2022)^{注1}では、聞き手の母語話者が行う調整行動として、前述の村上 (1997) の「意味交渉の方法」と猪崎 (1997)³を参考に、「明確化要求」「詳細要求」「理解確認要求」「聞き取り確認要求」の4項目を聞き手の母語話者が行う「修正要求」と名づけている。さらに、聞き手が行う「修正・援助」として訂正／繰り返し／言い換え・説明／例をあげる／確認する／提示／補足・完成／ジェスチャーなどを取り上げている。本稿では、これらをすべて聞き手の母語話者が行う調整行動として用いることとする。詳細については、第5節で説明を加える。

4 実験及びデータ

データとしては、長さ6分程度のアニメーションを見て、そのストーリーを語るという場面で得られた談話データを使用した。データの中で語られるストーリーは、ピングー・シリーズの「ピングーと凧」^{注2}という話である。

まず、語り手役である日本語非母語話者（以下、「語り手F」とする）にアニメーションを見せ、そのストーリーを聞き手役の母語話者（以下、「聞き手J」とする）に話してもらおうという実験（渡辺2003）により得られた7組分の談話データを用いる。

³ 猪崎 (1997) の「言語問題の処理の分類項目」を参照

[表1] 語りの接触場面の被験者の組み合わせ

	語り手F			聞き手J			接触経験
	性別	年齢	滞日年数	性別	年齢	職業	
データ1	K 1 (女)	20才	2年	J 1 (女)	20才	短大生	友人同士
データ2	K 2 (女)	20才	2年	J 2 (男)	23才	大学院生	初対面
データ3	K 3 (女)	19才	1年	J 3 (男)	23才	大学院生	初対面
データ4	K 4 (女)	19才	1年	J 4 (女)	20才	大学生	初対面
データ5	K 5 (女)	19才	1年	J 5 (女)	18才	大学生	初対面
データ6	C 1 (男)	22才	2年	J 6 (女)	19才	短大生	友人同士
データ7	C 2 (女)	23才	2年	J 7 (女)	31才	社会人	初対面

(K：韓国語母語話者 C：中国語母語話者 J：日本語母語話者)

7名の非母語話者は、全員日本に滞在する留学生で、1,100時間程度の日本語教育を受け、中級以上の日本語能力である。7名のうち、5名は韓国語母語話者で、2名は中国語母語話者である。[表1]は被験者の組み合わせと背景を示したものである。聞き手の日本語母語話者は、学生が6名と社会人が1名で語り手との接触経験は初対面または友人同士である。

5 接触場面の日本語母語話者の聞き手による調整行動

まず、4で示したデータの中から、あいづちなど語り手Fのターンにおいて行われた聞き手Jの発話を除き、聞き手Jの実質発話によってターン交替が行われた部分を取り出した。さらに、語り手Fによる援助要求など語り手Fの何らかのアピールがなく、聞き手Jが語りに介入し実質発話によって調整が開始された部分のみを分析の対象とした。

7組のデータの中で、語り手の何らかのアピールがなく、聞き手Jによる実質発話がなされたのは全部で36例観察された。[表2]は、聞き手Jが実質発話を行った36例がどのような目的で始められたのか、その内訳を示したものである。聞き手Jが語り手Fの発話に対し、単純に自分が聞き取ったことを繰り返して確認を求める「聞き取り確認要求」の例が7例、聞き手Jが「うん？」など聞き返しの言語形式を用いて語り手Fの発話が理解できなかったという表示をし、明確化を要求するものが4例、語り手Fの語った内容について、Jが理解できなかった部分をもう少し詳しく説明してくれるよう説明を求める「詳細要求」の例が7例、聞き手JがFの語った内容を言い換えて自分の理解を述べる「理解確認要求」の例が12例観察された。また、語り手Fの援助を求めるアピールなしに、聞き手Jが語り手Fの発話に対して[修正・援助]を行っているケースが6例観察された。これは、聞き手Jが語り手Fの発話に介入することで【調整開始】^{注3}となり、介入と同時に語り手Fの発話を補足したり、訂正したりするという【調整終了】が行われているケースである。このケースが観察された6例のうち、3例は聞き手Jが語り手Fの発話を言い換えたり、補足して完成するという「補足・完成」の例で、残りの3例だけが語り手の非母語話者の誤用に対し聞き手Jが訂正を行うという「訂正」の例であった。

〔表2〕 接触場面の聞き手Jによる調整行動の内訳

聞き取り 確認要求	明確化要求	詳細要求	理解確認要求	補足・完成	訂正	計
7例	4例	7例	12例	3例	3例	36例

5.1 「聞き取り確認要求」

「聞き取り確認要求」とは、聞き手Jがストーリーの内容を理解する上で正確に聞き取る必要があるものを、語り手Fの発話を繰り返して聞いたことが正しいかどうかの確認を行うものである。今回のデータで調整行動がなされた36例のうち、「聞き取り確認要求」の例は7例観察された。全体の7例のうち4例は、語り手Fより時間(例1)や登場人物の名前(例2)などが提示された場合、その数字や発音を正確に聞き取るために「聞き取り確認要求」が行われたケースである。また、聞き手Jの予測外の場面設定や展開に対して、自分の聞いたことに間違いがないかどうかの確認がなされた例で、この場合は、聞き手Jが語り手Fの発話を正確に聞き取ろうとするという目的よりも、聞き手Jが自分の理解を確認する意味も含め「聞き取り確認要求」を行っていると考えられる。また、例3)のように、語り手Fの文法的な間違いに対して聞き手Jがそれを直接的に訂正するのではなく、語り手Fの間違った発話をそのまま繰り返して「聞き取り確認要求」を行うことで、Fが自分の間違いに気づき、[自己修正]を行うよう働きかける手段として用いられる例も観察された。聞き手Jの「聞き取り確認要求」に対する語り手Fの反応は、聞き手Jが確認を求める部分だけをもう一度繰り返したり、あいづちを打つことで確認を示していた。

例1)は、語り手Fが提示したストーリーの中の具体的な時間について聞き手Jが「聞き取り確認要求」を行った例である。

例1) (データ1より)

- 1 F 急に気づいたのね、
- 2 F 一生懸命 [アイロンかけたり], 《ジェスチャーを交える》
- 3 J [夫婦して] 新聞読んだり, 《ジェスチャーを交える》
- 4 F した(うん)のに, 5時, 時計をみたら(うん) 5時40分だったの,
- 5 J 5時40分. 【開始/修正要求/聞き取り確認要求】
- 6 F うん, 5時40分にあっどうしたんだろうとか思って, (うん)
【終結/自己修正/確認する・繰り返し】

例2)は、子どもたちがいないことに気づいたペンギンの両親が、家の外に出て大きい声で子どもたちの名前を呼んで捜す場面の説明である。語り手Fにより提示された子どもペンギンの名前について聞き手Jが「聞き取り確認要求」を行った例である。

例4) (データ4より)

- | | | | |
|----|---|-----------------------|-----------------|
| 1 | F | あのう私が見たビデオは、(はい). | |
| 2 | F | 日本語はしゃべらない. | |
| 3 | F | 日本語でー | |
| 4 | F | しゃべらなくて、(はい). | |
| 5 | F | 〈L-penguin L-penguin〉 | |
| →6 | J | <u>うん?</u> | 【開始／修正要求／明確化要求】 |
| 7 | F | こういう感じで、[しゃべります]. | 【中間／自己修正／説明】 |
| 8 | J | [はいはい]. | 【終結／修正・援助／確認する】 |

例5) は、聞き手Jの「明確化要求」により【調整開始】となったが、聞き手Jの理解がはっきり得られないまま、【調整終結】となってしまったケースである。

例5) (データ4より)

- | | | | |
|----|---|--|---|
| 1 | F | で行って、ビンゴービンゴーとそのおじさんの家のちかー | |
| 2 | J | くでーうんうんうん. | |
| 3 | F | 呼んだら、(うん) 一緒に出て、一緒に帰った. いえに. | |
| →4 | J | <u>うん?</u> | 【開始／修正要求／明確化要求】 |
| 5 | J | あっおじさんからビンゴービンゴーと叫んできたから、(うん) 叫んでたら、(うん) | 【中間／修正要求／理解確認要求】
+ 【中間／修正・援助／言い換え・補足・説明】 |
| 6 | J | おじさんの、家から、二人の、(うん) あの子どもが出てきたから、(うん) | 【中間／修正要求／理解確認要求】
+ 【中間／修正・援助／言い換え・補足・説明】 |
| 7 | F | 一緒に、かえっ | 【中間／自己修正／繰り返し・確認する】 |
| 8 | J | 帰っ [あのうー] | 【中間／修正要求／理解不能表明・詳細要求】 |
| 9 | F | [そりに] 乗って. 《ジェスチャー交える》 | 【中間／自己修正／補足・説明】 |
| 10 | J | そりに乗って、(うん) | 【中間／修正要求／聞き取り確認要求】 |
| 11 | J | 親と、(うん) 親二人と、(うん) 子二人が、(うん) そりに乗って? (うん) | 【中間／修正要求／理解確認要求】 |
| 12 | J | 四人そりに [乗って] ? | 【中間／修正要求／理解確認要求】 |
| 13 | F | [それを] 持って. 《ジェスチャー交える》 | 【中間／自己修正／補足・説明】 + 【開始／援助要求／ジェスチャー型】 |
| 14 | J | あっん [持って]. | 【終結／修正・援助／提示】 |
| 15 | F | [たこ] 持って. | 【終結／自己修正／繰り返し・確認する】 |
| 16 | J | か [えった]. | 【終結／修正・援助／補足・完成】 |
| 17 | F | [かえっ] た. | 【終結／自己修正／繰り返し・確認する】 |

5.3 「詳細要求」

「詳細確認」とは、語り手Fが説明した内容の中で、聞き手Jが理解できない部分や確認が必要なものを具体的に述べることによって詳しい説明を求めるものである。前節の「明確化要求」が間接的に説明を求めるものであるのに対し、「詳細要求」は直接的なものであると言える。聞き手Jの「詳細要求」に対する語り手Fの反応も、聞き手Jが直接的に、そして具体的に聞きたいことについて述べているため、Jが求めているものについて語り手Fの反応が得られやすく、答えも的確であった。さらに語り手Fの答えのあと、ほとんどの場合、聞き手Jが語り手Fの説明を言い換えたり補足したりするなど、さらに自分の理解を確認する「理解確認要求」を行っていることも特徴として観察された。

聞き手Jによる調整行動のうち、「詳細要求」の例は7例観察された。聞き手Jの「詳細要求」に対する語り手Fの反応は、聞き手Jが「確認要求」を行った場合と違って「うん」とただうなずくだけの反応は見られず、Jの質問に答えるような形で説明をする〔自己修正〕が行われるが、そのあと聞き手Jは、必ずといっていいほど自分の理解を確認する「理解確認要求」の〔修正要求〕を行っていることが特徴的である。

以下は、聞き手Jより「詳細要求」がなされた発話交換例である。

例6) は、ストーリーの登場物について聞き手Jの「詳細要求」がなされた例である。

例6) (データ5より)

- 1 F 出てみたらお兄さんが(うん). そのゆき一玉を作って、《両手を丸く合わせ雪玉を固めるジェスチャーを交える》(うん).
- 2 F それをとろうと思って、《何かを投げるジェスチャーを交える》(うんうん).
- 3 F それを投げたらその凧に当たったんだけど、(うん)
- 4 F 当たってそれが落ちて全部破れてしまったの.
- 5 F 凧が,
- 6 J 凧. えどういう凧? 【開始/修正要求/詳細要求】
- 7 F なんかこういう四角の[たこーたこ]が、《指で空にひし形を描く》
【中間/自己修正/説明】
- 8 J [四角の一にほん]みたいな(うんうん) たこですか?
【中間/修正要求/理解確認要求】
- 9 F はいそうですね. @@@ 【終結/自己修正/確認する】

例7) は、語り手Fの説明を聞いていて、聞き手Jが場面の状況について説明を求め〔詳細要求〕を行った例である。

例7) (データ1より)

- 1 F それが屋根の上の(うん) 凧にあっ、あうんじゃなくて、[ああ] 《ジェスチャーを交える》
- 2 J [当たった].

- 3 F 当たっ [るんじゃないくて],
- 4 J [当たるんじゃないくて],
- 5 F あのグレーの (うん) 友達に [当たった] のね, @@@
- 6 J [当たっちゃ]
- 7 F だから, なんだよお前みたいな感 [じで言って],
- 8 J [あっ, その] グレーの (うん) ピングーはどこにいたの?
【開始/修正要求/詳細要求】
- 9 F あっ, 家の前. 【中間/自己修正/説明】
- 10 J 家の前に [いて], 【中間/修正要求/理解確認要求】
- 11 F [いっ] たらこの屋根までいか [ないで], 《ジェスチャーを交える》
【中間/自己修正/言い換え・説明】 + 【中間/援助要求/ジェスチャー型】
- 12 J [ないで], そのま手前で落ちた時にそのグレーのに当たっちゃったの。
《ジェスチャーを交える》 【終結/修正・援助/補足・説明】
- 13 F そう当たっちゃって, 【終結/自己修正/確認する】

5.4 「理解確認要求」

「理解確認要求」とは、聞き手Jが語り手Fの語った内容について自分が理解したことを質問の形で述べ、確認を求めるもので全体の36例のうち、12例と最も多く観察された。聞き手Jが語り手Fの説明した内容について理解の確認を求めるのは、語り手Fの発話の中に主語や目的語などが長く省略されたまま、Fが説明を続けていた場合や、聞き手Jが予測していなかった新たな登場人物や意外な物が出てくる場合であった。また、ストーリーの流れはほぼ把握できたとしても、語り手Fの表現不足や説明不足により聞き手Jが確認を行う必要があると判断した場合は、聞き手Jが語り手Fの説明を補足したり、言い換えた形で自分の理解を確認していた。「理解確認要求」の聞き手Jの発話に対する語り手Fの反応としては、聞き手Jが確認を行っている部分の発話をそのまま繰り返したり、「うん」や「はい」などのあいづちを打つことによって、Jの理解が間違いないことを伝える形をとっていた。

例8) は、ストーリーに登場する物について聞き手Jの「理解確認要求」がなされた例である。

例8) (データ1より)

- 1 F ピングーピングーって捜したのね, (ううん)
- 2 F おおこえで, おおこえで, でもいなじゃん, (ううん)
- 3 F だからモーターついてるー (うん) ソリ, をにのって, 《ジェスチャーを交える》
- 4 J モータ, バイクみたいな感じ? 《ジェスチャーを交える》
【開始/修正要求/理解確認要求】
- 5 F そうそうそう, 速いやつに乗って, (うん) 《ジェスチャーを交える》
【終結/自己修正/言い換え・説明】
- 6 F 捜しに出たのね, (うん)

例9) は、語り手Fが説明した場面の状況をJが言い換えて自分の理解を確認している例である。

例9) (データ1より)

- 1 J 家の前に [いて],
- 2 F [いっ] たらこの屋根までいか [ないで], 《ジェスチャーを交える》
- 3 J [ないで], そのま手前で落ちた時にそのグレーのに当たっちゃったの。
《ジェスチャーを交える》
- 4 F そう当たっちゃって,
- 5 F お, 大声出したりして, (うん)
- 6 F 何だよ (うんうん) っていったら,
- 7 F ピングがそこにいるな [みたい] [(うん)] な感じで [言って]
- 8 J …[えっ] そのちっちゃい子が怒ったの? 【開始／修正要求／理解確認要求】
- 9 F そう怒っ [た]. 【終結／自己修正／繰り返し・確認する】
- 10 J [怒った]. 怒って大声出した. 【終結／修正要求／理解確認要求】
- 11 F そうそうそうそう. 【終結／自己修正／確認する】

例10) では、聞き手Jが語り手Fの説明不足の部分を補って自分の理解を述べている。

例10) (データ2より)

- 1 F あっその一えと凧がある? (うん). ところに行ってみたら, (うん).
- 2 F あそこに? 自分の? 子どもたちがいて,
- 3 F おじいさんにありがとうございましたとって,
- 4 J あっ凧作ってもらったからね, 【開始／修正要求／理解確認要求】
- 5 F あっはい. 【終結／自己修正／確認する】
- 6 F そして4人で家に帰る.

5.5 「補足・完成」「訂正」

語り手Fからの助けや協力を求める[援助要求]なしで、聞き手Jが語り手Fの発話を訂正したり、補足したりするなどの[修正・援助]を行うケースである。これは、聞き手Jが自ら語り手Fの発話に介入することで「調整」が始まり、Fの間違いを訂正したり、Fの説明に補足したりして発話を完成させることで「調整」が終わるといふ、【調整開始】と【調整終結】が同時に同じ発話の中で起こるものである。本研究で使われた7組のデータの中で、6例が観察された。

今回のデータでは、言語能力が限られている語り手Fの発話から、数多くの誤用や不自然さが見られたにもかかわらず、このケースが観察されたのが全体で6例だけで、しかも、この6例のうち、3例が語り手Fの発話を補足して完成させたり言い換えたりしている例で、語り手Fの文法的な間違いなどを訂正している例は3例のみであった。

聞き手Jの【調整開始・終結／修正・援助】の発話のあとの、語り手Fの反応は、相手の発話を認めるあいづちや繰り返しが多かったが、特に何の反応も示さず説明を続ける場合も観察された。

例11)は、聞き手Jが文を完成させ【修正・援助】を行った例である。

例11) (データ4より)

- 1 F うん二人が二人の子どもが(うん)なんか話して、
- 2 F 他の一ところに行く。(3秒)(うんうんうん).
- 3 F そーり?そり.[そり].
- 4 J [そり].
- 5 F そりに乗って.
- 6 J そりに乗って行った. 【開始・終結／修正・援助／補足・完成】
- 7 F 行った.(うんうん). 【終結／自己修正／補足・完成】

例12)は、ストーリーの最後の場面の説明で、語り手Fの発話を聞き手Jが言い換えて補足している。

例12) (データ1より)

- 1 F [みつかって]よかった,ごめんね(ううん).みたいな感じで,
- 2 F お母さんは友達に行って(うん).こう同じく(ううん).して,
《ジェスチャーを交える》
- 3 F お父さんが(うん).おじいさんにあっありがとうござい(ううん).ましたっ[て握手したり,]《ジェスチャーを交える》
- 4 J [お世話になりました.] 【開始・終結／修正・援助／言い換え】
- 5 F うんうんうそうそう. 【終結／自己修正／確認する】
- 6 F こんな感じで握手して,(うん).

例13)は、語り手Fの説明した内容に対し聞き手Jが訂正を行っている例である。聞き手Jの【修正・援助】に対し語り手Fは特に何の反応も示していないので、「調整」の過程が見られない。

例13) (データ1より)

- 1 F だから,今度は,隣で,(うん)アイロンをかけてる,(うん)
《ジェスチャーを交える》
- 2 F お[父さんに,なんか]頼んだのね,(うん)
- 3 J [お父さんなぜアイロンかけて].
- 4 F あの風が外に落ちて,(うん)
- 5 F あれを[なんか手伝って]くださいみたいな,
- 6 J [<WH 屋根の上に WH>] 《ジェスチャー》
【開始・終結／修正・援助／訂正】
- 7 F ああいう感じでいったら,(うん)

例14)、例15) は、語り手Fの文法的間違いに対し、聞き手Jが[修正・援助]を行った例である。

例14) (データ4より)

- 1 F でその人の家に入って、(うん)
- 2 F なんなに? 《ジェスチャー》
- 3 J 呷.
- 4 F 呷. 呷を作る.
- 5 J 作った. 【開始・終結/修正・援助/訂正】
- 6 F 作った. (うんうん). いっしょ. 二人で. 【終結/自己修正/訂正】

例15) も、語り手Fの「直接アピール」のあと、聞き手Jによる訂正が行われた例である。

例15) (データ3より)

- 1 F これなに? 呷が一
- 2 J やぶれっ [て雪で, 雪 <X X>], 《ジェスチャーを交える》
- 3 F [あーやぶれっちゃって] うん破れちゃって, (はい)
- 4 F 遊ばないー
- 5 J 遊べないー [くなっただんですか]. おー 【開始・終結/修正・援助/訂正】
- 6 F [遊べない. うん] <X X> っただんです. 【終結/自己修正/訂正】

以上、語り手Fの援助を求めるアピールなしに、聞き手Jが語り手Fの発話に対し[修正・援助]を行っているケースについて考察した。これは、聞き手Jが語り手Fの発話に介入することで[調整開始]となり、介入と同時に語り手Fの発話を補足したり、訂正したりするという[調整終結]が行われているケースである。

語り手Fが、自分の語彙不足や運用力不足を補うため、聞き手Jへ[援助要求]を行う場合の他に、日本語の文法的な間違いや語彙選択の不適切さなど、語り手Fが気づかずに誤用になってしまった発話が数多く観察された。それにもかかわらず、聞き手Jがこれらに対し直接[修正・援助]を行ったのはわずか3例で、そのうち語り手Fの文法的誤用に対し訂正が行われたのが2例のみという予想以上に少ない結果であった。

今回得られたデータの談話の目的は、語り手Fにとっては自分が見たビデオの内容を聞き手に伝えることであり、一方、聞き手Jにとっては語り手Fの語った内容を理解するということが目的である。そのため、談話本来の目的ではない理由で、聞き手Jが語り手Fの発話に介入し、Fの発話の不適切さを指摘し、訂正を行うことは、語り手Fのフェイスを脅かす行為になることに聞き手Jが留意し、語り手Fからの[援助要求]なしで[修正・援助]を行うことをなるべく控えた結果がこのような数字として現れたものと言える。

また、語り手Fの文法的誤用に対し、直接聞き手Jが訂正を行った2例にも同じような特徴が見られ、両例とも語り手Fの「直接アピール」に対し、聞き手Jが[修正・

援助]を行った直後になされていたことが分かった。これは、聞き手Jへ助けを求める働きかけが最も強い語り手Fの「直接アピール」の[援助要求]が、【調整終結】になったあとの発話にも影響を及ぼし、聞き手Jがその働きかけに影響され訂正を行ったのではないかと考えられる(例14、例15)。例15)の場合は、語り手Fの誤用を訂正したあと「～くなったんですか」と自分の理解を確認するような発話に変え、発話を和らげようとした聞き手Jの行動も観察された。また、語り手Fの語彙選択の不適切さにより、聞き手Jが訂正を行った例13)の場合でも、聞き手Jが独り言のようにFの発話を訂正し、[修正・援助]を行うという、やはり語り手Fのフェイスを脅かすことに留意した聞き手Jの行動が観察された。

6. まとめ—接触場面の日本語母語話者の聞き手調整行動の特徴

接触場面において聞き手Jによって【調整開始】となるケースは、語り手Fが語った内容について聞き手Jが説明や確認を求める場合と、語り手F自身が気づかない発話の不適切さに対し聞き手Jが訂正などを行う場合がある。

まず、聞き手Jが説明や確認を求める場合は、その目的によって「聞き取り確認要求」「明確化要求」「詳細要求」「理解確認要求」に分けられる。「聞き取り確認要求」は、登場人物や物の名前に関する固有名詞や、時間など、語り手Fの発話を正確に聞き取る必要があることについて確認を求めるものである。次に「明確化要求」は、語り手Fの説明の中で理解できない部分について聞き手Jが聞き返しをして説明を明確にするよう求めるもので、「詳細要求」は、聞き手Jが理解できない部分を質問の形で具体的に説明を求めるものである。聞き手Jの単なる聞き返しによる「明確化要求」は、多くの場合、その発話意図が語り手Fに伝わりにくく、「明確化要求」の後、さらに明示的に説明を求める「詳細要求」がなされることが多かった。最後に、「理解確認要求」は、語り手Fの説明を聞き手Jが言い換えて自分の理解が正しいかどうかの確認を求めるものである。これらによって、ストーリーを理解するためには語り手から必要な情報を受け取らなければならないという情報の受け手としての聞き手の目的に合わせて調整行動を行っていることが分かる。聞き手が求めている情報が語り全体において重要であればあるほど、調整を繰り返したり、より明示的に情報提供の要求を行い、必要な情報を導き出していた。

次に、語り手Fの助けや協力を求める[援助要求]なしで、聞き手の日本語母語話者「補足・完成」「訂正」などを行う場合である。中でも、語り手Fが気づかない語り手Fの日本語の間違いを、聞き手Jが指摘し訂正を行うケースは、接触場面において数多く観察されるのではないかという当初の予想に反し、3例のみという非常に少ない結果となった。これは、情報の受け取りにおいて支障をきたすような日本語の間違いでなければ、日本語の不適切さを指摘するという相手のフェイス(面子)を脅かす行為を聞き手の母語話者がなるべく行わないようにしたことが理由として考えられる。もう一つの理由としては、串田(2009)が語りの談話において聞き手が語りの進行促進を目的に「あいづち」などで語りの継続支持を行うと述べているように、日本語母語話者の聞き手は、情報の受け手として語り手の非母語話者が語りを主導し進行することを手助けする役割を意識していたからではないかと考えられる。一方、串田

(2009) が語りの進行を促進すると指摘する、「それで？」などの継続支持標識、反復による「継続催促」や、先取りなど聞き手自ら語りの継続そのものを行う「継続試行」の例は今回のデータからは確認されなかった。これについては、接触場面においての日本語母語話者の聞き手が母語場面に比べ語りを盛り上げたり、共同して作り上げるという意識よりも、語り手である日本語非母語話者の語りの成功を手助けするという意識がより強く働いたからではないかと考えられる。これを検証するためには、語り手の日本語非母語話者の日本語能力による聞き手の母語話者の関わり方の違いや日本語非母語話者との接触経験の違いも考慮に入れるべきであると考えられる。

注1

澤（2022）の「調整」の発話機能及び表現形態別分類

	行為者別の「調整」行動	発話機能及び表現形態
語り手Fによる	援助要求	直接アピール 間接アピール ジェスチャー型 語彙や形の確認 理解の確認
	自己修正	訂正／繰り返し／言い換え・説明／ 例をあげる／確認する／否定／補足・ 完成／ジェスチャー
聞き手Jによる	修正要求	聞き取り確認要求 明確化要求 詳細要求 理解確認要求
	修正・援助	訂正／繰り返し／言い換え・説明／ 例をあげる／確認する／提示／補足・ 完成／ジェスチャー

注2 「ピングーと凧」のあらすじは以下の通りである。

ピングーと妹のピンガは家の庭で凧揚げをしていたが、家の屋根に凧がひっかかってしまった。ピングーは雪玉を投げて凧を落とすが、その衝撃で凧が壊れてしまった。ピングーとピンガはママとパパに凧を作ってもらおうとしたが断られたためその代わりにおじいさんに凧作りを頼みに行った。おじいさんがいいよと言ってくれたため、ピングーとピンガはおじいさんと一緒に凧を作った。一方家ではパパとママがピングーとピンガが戻ってこないことを心配し、2人を探しに出かけた。おじいさんの家に向かったところ、3人で作った凧が揚がっていた。パパとママはおじいさんにお礼を言った後、家族全員で車に乗って凧を揚げながら家へと帰って行った。

注3 澤（2022）では、接触場面において「調整」がどの段階でなされたかについて、以下の3つに分類している。

【調整開始】：語り手と聞き手のどちらかが不適切さに気づき、または不適切さを指摘し、相手へ「調整」の要求を始める部分である。

【中間調整】：「調整」が開始されてから、お互いに発話の理解・解釈のためのやりとりをする部分である。

【調整終結】：語り手と聞き手の相互理解がとれ、お互いに確認し合う部分である。

参考文献

- 猪崎保子 (1997) 「日本人とフランス人日本語学習者の会話にみられる「修正」ストラテジー」『世界の日本語教育』日本語教育論集7, 77-95.
- 串田秀也 (2009) 「聴き手による語りの進行促進—継続支持・継続催促・継続試行—」『認知科学』16 (1), 12-23.
- 澤恩嬉 (2022) 「接触場面の語りの談話における「調整」過程の基本構造とその特徴」『文化』86 (1, 2), 25-44.
- 伝康晴 (2009) 「聞き手行動の認知科学に必要なもの」『認知科学』16 (4), 475-480.
- 西川玲子 (2005) 「日常会話に起こるナラティブの共同形成—理論構築活動としてのナラティブ—」『社会言語科学』7 (2), 25-38.
- 藤長かおる (1995) 「初中級日本語学習者のコミュニケーション能力についての一考察」『日本語国際センター紀要』6, 51-69.
- 村上かおり (1997) 「日本語母語話者の『意味交渉』に非母語話者との接触経験が及ぼす影響—母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて—」『世界の日本語教育』日本語教育論集7, 137-155.
- 李麗燕 (2000) 『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究』くろしお出版
- ロング・ダニエル (1992) 「日本語によるコミュニケーション—日本語におけるフォーリナー・トークを中心に—」『日本語学』11, 13, 24-32. 明治書院
- 渡辺文生 (2003) 「日本語学習者と母語話者の語りの談話における指示表現使用についての研究」平成13~14年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書
- Sacks, H. 1992. Lectures on Conversation. 2 vols. Blackwell.
- Pica, T. 1994. Research on negotiation: What does it reveal about second-language learning conditions, processes, and outcomes? *Language Learning* 44:493-527.